

# ダイナミックコーチング 一人と組織の変革

小谷 英文 著

「グローバル化以前の社会・文化背景では決して流行ることのなかったわれわれの心理療法ではあるが、それでも他に手だてがない困難状況で助けを必要とした個人と組織には、着実に役に立っている。その理論と技法の応用を、自己経営能力アップ、ひいては組織運営力アップのコーチング技法に向けた。他のどの方法も及ばない強力なパワーを発揮することを目論んだ我々の新しいプログラムの誕生である。…

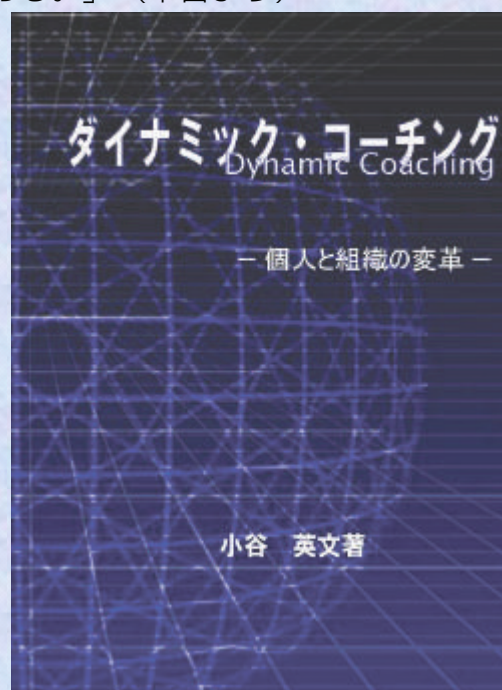
したがってこれは、勉強して寝かせるものではなく、そのまま自分の体力に組み込まれるものであり、自己経営ソフトの更新とそれに伴う運用技術の精錬を果たして行くものである。その意味で頭の勉強のためにだけなら本書は読まない方がいい。本書は、行動し研究する人のための本であり、自己の行動を、心と身体を一致させることによって豊かでキレイのいいものにするための本である。

行動の中で本書を楽しみ、研究し、自分自身を楽しむことによって、グローバル社会におけるスマートな自分のアイデンティティが見ええくれば幸いである。」（本書より）

ダイナミック・コーチングについてのお問合せは、  
PAS心理教育研究所 まで  
お気軽にお寄せください。

- PRRC-IADP2008会場でもお求めいただけます。
- [Amazon.co.jp](http://Amazon.co.jp)、当研究所ホームページでのお求めもご利用いただけます。

定価 3,000円（税込価格）  
PAS心理教育研究所出版部 発行



**PAS**

パス心理教育研究所

*Institute of Psychoanalytic-Systems Psychotherapy*

〒153-0043 東京都目黒区東山2-5-19 ハイランドビル3階  
電話 & FAX : 03 (3791) 1615 (電話受付時間 平日午後2時~6時)  
ホームページ : <http://www.pas-ins.com/>

) 所長 能 幸夫 (のう ゆきお)

# 読者の方々より 寄せられたご感想

「ダイナミックコーチング 一人と組織の変革」が2008年8月に出版されて以降、多くの方から直接のご感想をいただいております。  
このページでは、書面にてご感想をいただき、掲載の許可を頂いたものについて皆様にお伝えできればと思っております。  
こちらのページへのご感想もお待ちしております。

FAX : 03-3791-1615  
PAS心理教育研究所出版部

・ダイナミック心理学は、能動性の機微を見通す、との指摘は、私たちのもつ心理学にたいする既成観念を打ち砕きます。宮本武蔵の「空」と「心的安全空間」の定義は、よく分かる内容です。(p. 30, 31)

・「身体性がないところに、人間関係は深まりようがなくそこでの絆は無意味なものになってしまう。自我を身体で体験する身体自我の同一性感覚は、いまや育てようと意識して、育て直しをしなければ容易に失われてしまう。」(p. 88) 人間関係の希薄さの原因をついた指摘でしょう。また、「現代の企業社会におけるうつ蔓延にも、構造的ストレス社会の問題のみならず、現代人の身体性の脆弱化が大きく関与している可能性が高い。」の指摘も、新たな提起です。また、心的安全空間の体験の規定(p. 89)のあと、「自我の弾力性の本質が見えないままに、タフな営業精神と行動力を鍛える研修に走り、成果が上がらないことに苦慮する企業や、研修業界の悩みを聞くことも多い。・・・人格の構造と社会の接点の力学が考慮されていない弱さが目立つ。・・・自我はただ強いだけでは、とりわけ現代社会での適応は困難である。社会が要求するベクトルと、個人があるいはその集合組織体が追求するベクトルとが、どのように拮抗あるいは噛み合うかを調整できる自我力こそが、育てられなければならないものであり。そこに強さを生かす弾力性の鍵がある。」(p. 90)の指摘は、研修をめぐる彼我の関係を明らかにし、自我の弾力性の大切さを強調されています。そうだ、と思いました。これまで、研修を受ける側の心理状態など考えたこともなかったのですから。

・リーダーシップ論(p. 124~125)は、実に良いですね。集団に対するコンプレックスと克服の課題が提示されています。とくに、「古典的な概念と大きく異なる点は、リーダーシップをひとりの個人に負わせない点にある。・・・集団力学の数だけリーダーシップはあるともいえる。」は、新しい提起だと思いました。納得。そして、「残念ながらわが国には、集団力学については実践に遠い専門書があっても、実践を支える

レベルの理論と技法の構築がなされた著書がない。」(p. 126)「集団力学に基づいたリーダーシップを学ぶ上では、体験が知識に先行したほうがいい。」(p. 127)実践が光りますね。

・「コーチングは、あくまでコーチを受けようとするクライアント側のモチベーションと意欲があって成り立つものである。そして、そのモチベーションは、マイナスをゼロにするものではなく、マイナスからプラスを引き出し、プラスをダブルプラスにさらにはトリプルプラスに高めるものである。つまり底には必ず新しいものを学び、身につけるという学習過程が生じなければならない。・・・欠かせない条件とは、冒険である。自ら危険を背負う冒険に乗り出す勇気が、必要条件である。」(p. 127)当然のことでしょうが、厳しいものなのですね。「危機介入」(p. 135~140)は、初めて出会った考え方で、新鮮に感じました。理解できた、というより、自分に実践できるかな、と不安でドキドキしました。また「身体事象のフィードバックは、全て大脳にまで戻ってフィードバックされるとは限らない。大脳を介在しないショートカットの身体のみでフィードバックされるプロセッシングのあることも、忘れてはならない。・・・『体が覚える』」(p. 145)。茶の湯の世界で、点前の流れを習うとき、「頭で考えず、身体で覚えなさい」と常々叱られます。また、これは教育でなく躰ですとも言われます。四十からの手習いは、なかなか身体が覚えてくれません。

「心の世界に触れ、クライアントに影響を与える仕事に携わる実践家の言葉も分析も、本来その人の身体全体から発せられるものでなければ、影響を与えるものにはならない。態度、言葉、気持ち、その場のごまかしや防衛とは異なる表現は、全て身体で実感しているものでなければならない。身体でつかむ技術こそがアートといえるものになる。」(p. 169)繰り返し、身体性が強調されますね。あの人の目は力がある、とか、あの人の言葉には妙に説得力がある、などはこれに当てはまるものでしょうか。

・「行動を起こすにはリスク・テイキングが伴う。その壁を越えさせるものが、覇気であり、時に攻撃性であったりもするのである。それは、自我の成熟性の産物でもある。」(p.149) 覇気、久しぶりに聞く美しい日本語です。小谷先生の覇気がよく伝わります。「感じることは考えることと行動することのリンクを豊かに保ち」以下の150ページの記述は、[感じる]ことの大切さを再確認させられました。

・「日本の日記教育には伝統があるが、議論の教育にはない。議論することが時には和を乱すこととして抑制されることすら珍しくなかった。コーチング文化を再編しようとする本書の意図も、この弱い伝統の認識を踏まえている。」(p.164) 全く同感です。青年たちよ、議論をしよう。もっと激しく、攻撃的に。おいしいものを食べながら、涙を流しながら。

・「何事もことが始まらなければ、努力も工夫の余地もない。……事は始めてみなければ、豊かな本質には触ることさえできない。……」(p.181~182) 本当にそうなんですよ。でも、始められない人が多いですね。「考える前に、飛べ」と言いたいです。なんとかしたいですね、ここは。幸不幸の分かれ道なのです。

・逆推理の論理(p208)と予測構成法(p.210)の提示は、「予測解析ソフトを作るケーススタディ」として、人にパワーを与えるための勉強になります。

・コーチングの汎用性(p.217~221)への展開は、プロ対応だけでなく一般の人びとへの展開が可能だとするもので、これは多くの国民を対象とした将来への巨大な可能性を示すものです。

・心的安全空間論(p.222~225)は、読めば読むほど、居心地の良さを感じます。与えられる安心感から、獲得する安心感へ、そして自分自身の心的安全空間の保持へ、のストーリーはよく分かります。私は、禅のことは門外漢ですが、かつて無謀にも表千家流茶道の理論的支柱である堀内宗心宗匠に、21世紀の茶の湯はどうあるべきかを手紙で直接質問したことがあります。誠実な方ですので、また直接返事をいただいたのですが、これからはやはり原点に戻って禅を学ぶ必要があると強調しておられました。端的な言葉としては「平等性智」と書かれ、泥棒でも社長でも与えられた役割を精一杯実行する意味において平等である、という趣旨であったと理解しています。利休が秀吉に対抗したのもこの思想かな、と思いました。小谷先生のお考えに刺激を受けて、茶の湯…禅…心的安全空間と結び付けつつあります。そうだとすると、今の時代こそ特に男たちにお茶を習おうと呼びかけたくくなりました。

私自身の体験でも、お茶の稽古中は仕事の疲れと全く違う、脳の別の部分を駆使していることが分かりま

す。そして、堀内宗心(ほりのうちそうしん)宗匠は心的安全空間保持の権化とも言うべき傑出した茶人です。そういえば、裏千家の坐忘斎(ざぼうさい)家元は同志社大学の心理学科出身で、この人の人間を見つめる目も鋭く暖かく、私は尊敬しています。禅の修業が積まれているのでしょうか。高校時代に、学生運動の経験もあります。利休以来の歴代家元の最後尾に位置する者としての重圧は底知れぬものがありますが、それを払いのけて自身の心的安全空間を作り上げる努力はどういうものなのでしょうか。知りたいものです。

・「集団、組織、社会」論(p.225~229)も、グローバル化の中での個人と組織、社会の激変を語り、まるで文明論を読んでいる感じで圧倒されます。グローバル化が及ぼす影響の大きさに、驚かされます。その変化の嵐の中でつくづく思うのは、うまずたゆまず直接相手と面談しながら人的ネットワークを広げていくことの大切さです。仕事でも、それ以外でも、自分を助けてくれ自分を成長させてくれるものは、これしかないのだ、との思いです。キーワードは、義理と人情。私など、昼はさして忙しくないのに、夜になると手帳のスケジュールが一杯で、今日はあのお座敷、明日はこれのお座敷と、飛び回る毎日です。毎日飲んでいるばかりではないのですが。仕事に関係したことで、ある先端IT機器開発の学会が、なぜか温泉旅館貸しきりで開催し1部屋に4、5人入れて、大学教授も大企業研究者も学生も寝食をともにし、徹夜で議論するのだと聞かされました。その中から、新しいアイデアが飛び出し、製品化につながるそうです。だから、参加者が増える一方だと。

・「小集団の時代」・「小集団を介したコーチングの汎用性」(p.229~263)に描かれた本書の結論は、きわめて具体的です。心理学者が小集団の理想サイズまで踏み込んでよいのだろうか、いぶかるむきもあると思いますが、ここは小谷先生の決然たる意思が現れていて爽快です。小集団のサイズは4名から8名が標準とされていますが、私が今関わっているのは4名から10名です。ゴールデン7が理想形だとのこと指摘は、今後頭に入れて進めます。ちなみに、私の家族は7名です。いずれにしても、小集団の時代で締めくくるのは、納得がいきます。この考えが、新しい希望のある社会を作るうえで、その基礎単位として大きな生命力を持つものと、期待しています。そして、この考えはまず自分自身で実践してみなければ分からないのも、事実です。

・今日のニュースで今年のベストセラーが発表され、自分を見つめるための本がよく売れている、との報道でした。ばらばらにされた個人が、内向き思考で一人自分と向き合っているが、そこに待っていたのは血液型や占い、組織内で身を任せるハウツーなど非科学的な見解の連打です。これでは、ますます閉塞感が増し

---

希望が持てなくなるのは、火を見るより明らかです。時代のニーズは、この国民的ともいえる閉塞感を打破する心理学を要求しています。このダイナミック・コーチングの理論が、悩める多くの人々の間に静かに深く浸透することを希望してやみません。科学の書の普及を、切望します。

**皆様からのご感想、お待ちしております。**